

## 第 2 部 交わりを生きる地区共同体

### まえがき

第 1 部で確認が行われた、現在までの教会の歩みと阪神淡路大震災後の動きをまとめてみると、大阪教区の教会新生のための基本方針の中心となる考え方は、以下のように図式されると思います。

#### ◎教会の使命

「交わり証しする教会」

#### ◎使命を果たすために大阪教区が目指す教会像

- (1) 「谷間」に置かれた人々の心を生きる教会
- (2) 「交わり」の教会
- (3) 「共同責任」を担い合い、協働する教会
- (4) 聖霊の導きを識別しながらともに歩む教会
- (5) 司祭・修道者との協力を重視しながら、信徒の役割と責任（使命）を前面に出す教会

#### ◎教会像を実現するための行動指針

「現実—共同体—信仰」を生きる

「交わりの使徒」としての派遣に生きる

第 2 部では、この教会新生のための基本方針に含まれる内容豊かな考え方を、変化していく社会の中での小教区の現実を考え、その限界を示し、かわりに地区の持つ可能性を見出し、地区を中心にした今後の大阪教区を考えていきたいと思えます。

# 第1章 今後求めていく「新生」教会像に向けて

私たちが、日頃口にする教会は、具体的には小教区でした。また、典礼の場や交わりの場も小教区が中心です。このことを考慮しながら、教会像を考えていきたいと思えます。ここでは考えるための材料として、NICE-1 後、日本の司教団によって作られた NICE-推進委員会(1988 年発足)の中にある「制度を考えるチーム」による司教団への答申と資料をまとめた『明日に開く—開かれた教会作りをめざして』(1995 年)を大幅に参考しています。

## (1) 社会の変化の中での小教区

『明日に開く』の中に、多くの現状分析がありますのでここに取り出してみました。以下に述べられた状況の変化に応える共同体が求められています。そのためには、一人の司祭、一つのグループ、単独の小教区の努力だけでは対応しきれないほどの課題となっています。

### ① 生活地域の拡大

現代人の生活とその活動は、現行の小教区制度がうまく機能できた地域社会を中心とした生活範囲から大きく替わり、小教区の枠にとどまらなくなっています。例えば、大阪市内に住みながら、夫は神戸の職場に通い、子どもは京都の学校に、妻は和歌山のボランティアなどという形が考えられます。

### ② 人口の移動による過疎と過密

産業構造の変化にともなう農村部から都市部への人口の移動と、土地の高騰により都市の中心部から郊外への人口の移動を受けて、急激に過疎化していく小教区がある一方、信徒数が増加する小教区が増えています。この変化の中で、定住し続ける信徒を意識した従来の小教区の限界が、組織の運営、転入した信徒の受け入れの不備などに見られます。

### ③ 交通網整備による共同体の変化

交通網の整備がなされたことにより、距離の遠近よりも、所要時間の長短が所属小教区を決める要因となっています。また活発な活動をしている小教区にはさらに人が集まり、ある小教区から転居しても、いままでの人間関係を求めて以前の小教区に通い続けるなどの現象が見られます。これらの現象は、地域社会を中心とした従来の小教区制度が、質的に変化せざるを得ないことを示しています。

### ④ 高度成長を達成したことによって引き起こされた問題

経済の発達を優先した社会構造、進学と受験を中心に展開される教育、高齢化社会の問題などなど、簡単には解決できない状況の中で、多くの人々は、戸惑い、迷い、流され、時には傷つき倒れ、「交わりの喪失」に直面しています。目的としていた、豊かな社会の実現が逆に、予期していた以上の人間性の軽視や交わりの喪失をもたらしています。例えば、会社中心主義、

長時間労働、単身赴任、進学・受験の激しい競争、少子化、核家族化など人々は心身ともに疲れ、人と人の繋がりを失っています。小教区活動は、以上のような状況の変化に十分に対応しきれなくなっています。

## (2) 小教区制度に見られる意識

『明日に開く』では、このような変化にもかかわらず、私たちが従来通りの小教区意識を持ち続けていることを指摘しています。

- ① 小教区制度には長い歴史があり、今なお多くの司祭、信徒は何の問題意識もなく受け入れ、適応しています。
- ② 小教区共同体は、多くの信徒の信仰生活を支え養うほとんど唯一の場となっています。
- ③ 小教区共同体は、多くの信徒にそれぞれのタレント、要望、可能性に応じた、地域に根差した活動の機会と場を提供していると満足しています。
- ④ 小教区共同体は、仲間との出会いの場となり、家族的な仲間意識を育て、互いに支え合う場となっています。
- ⑤ 信徒の多くは、小教区の共同体に深い帰属意識をもち、それを土台としてカトリック教会全体とつながっています。
- ⑥ 信徒の多くは、主任司祭への依存心が強く、主任司祭との人間的な関わりで信仰を支えています。

さらに

- ⑦ 信仰を表す主要な場が、小教区に限定され、小教区に頻繁に通い、そこでの諸活動に積極的に参加することで満足して、社会では受け身にかかわってしまいがちです。
- ⑧ 社会の諸問題を、福祉活動など自分たちの小教区で担える活動に限定し、それ以上の社会正義、社会構造への問題意識をあえて取り上げようとしなくなっています。

確かに、歴史の流れをふまえた小教区制度は、多くの実りをもたらしてきました。また諸先輩方の働きによって、教会が発展してきたことを評価したいと思います。しかしながら、前に挙げた社会と生活環境と意識の変化を考えると、変化に伴う人々のニーズに答えられなくなっている事がわかります。

司祭の減少は、いやがおうでも今まで常識的だった司祭常駐の小教区の姿を変化させるでしょうし、現在の頻繁で広範囲な人々の交流は、共同体自体が変化していることを示します。主任司祭主導の小教区運営は、信徒の生活の場に広がる豊かな意識を受け止められなくなっています。小教区が育ててきた良さを充分認めながら、新しい発想と取り組みが必要になっているといえるでしょう。

## (3) 制度を考えるチームの提言から

制度を考えるチームの「小教区制度とその共同体のあり方の見直し」の提言は、現在の小教区に

対して求められている対応の仕方を示しています。そして、そこにはそのニーズに迫られ、教会が大きく変化することを迫られている状況が見て取れます。大阪教区でも一つひとつの提言に対応がなされています。提言のテーマをここに示しながら考えていきましょう。

#### ① 司祭間の話し合いの促進と共通理解の育成

この問題は、大阪教区でも司祭の協力の大切さとして、話し合われていますし、あるところでは実行されています。また、地区でも司祭の集会在毎月開かれ、司祭の王竜が大切にされています。

#### ② 信徒を対象とした啓発運動

大阪教区では、生涯養成コースとして継続的に行われています。そこでは信徒の社会の中で生きる信仰への深まりと広がりを探求しています。(当初の狙いでは、司祭・修道者・信徒が共に学び合う場として企画されましたが、実際の参加者は、信徒が圧倒的に多くなっているのが現状です。)

#### ③ 司祭と信徒との役割の再評価

大阪教区でも、共同体への共同責任の問題として、聖体奉仕者などの信徒の役割の見直しが行われています。また、各種の評議会を充実させることにより司祭と信徒のもつ固有の役割を再発見しようとしています。

#### ④ 近隣の小教区の司祭・信徒間の協力の促進

多くの小教区同士で、合同キャンプや合同結婚講座などが行われています。このことによってお互いに刺激し合い、それぞれの小教区の限界を捕らえるものと思われま

#### ⑤ 共同宣教司牧の導入

1995年春から、大阪教区でも共同宣教司牧が行われています。多様化する社会と信徒のニーズに対応するための、宣教司牧共同体の具体化です。

#### ⑥ さまざまな分野での実践的な連携と協力

司祭と信徒との連携や教区と諸事業体との協力などです。阪神淡路大震災の時は、カトリック医療協などの職業的・専門的な分野での協力、姉妹教会制度による援助活動などがありました。

#### ⑦ 善意の人々との協力・連携

ボランティア活動やカリタス活動、正義と平和の活動は地域の人々や社会の人々との連携の下に成り立っています。阪神淡路大震災の援助活動は、各種のボランティア団体との連携を作るきっかけとなりましたし、今もなお続いています。

#### ⑧ 生き生きとした典礼

祈りと典礼とは、共同体を一つに結び付ける大切な要素です。特に、どのような人々(年齢層や、色々なハンディキャップを持った人々)にも開かれた典礼は大切になります。大阪教区の教区や地区レベルでの典礼には、手話や OHP などの配慮がよく見られるようになりましたし、色々な立場の人たちが集まることができ、ハンディキャップの人たちや弱い立場の人たちがキリスト者の共同体には不可欠の生命線だという意識が浸透しつつあります。

⑨ 教区に「制度の見直し」を推進するチームの設置あるいは担当者の任命。

小教区をより豊かに見直し、組織的・計画的な取り組みが求められています。新生計画実施要領作成委員会などもその方向に沿ったものと思われます。

以上の提言を、よく考えてみますと、現行の小教区制度を補うための活動がすでに始められていることがわかります。と同時に、いままで余りにも多くのことを小教区に担わせ続けてきたことへの挑戦のようにも受け取れます。小教区制度がもたらした自己完結型の教会の共同体のあり方、小さな枠の中だけの発想しか生み出さない意識、一国一城の主的な主任司祭の態度などを、超えていくようにとの促しでもあるようです。

また、現状分析や提言に出てきた、小教区の枠を超えたニーズの広がりやニーズの多様性の問題からも、それに答えた教会の姿を作り出すことが求められているのです。

## 第2章 「新生」教会に向けて、地区を宣教司牧共同体の中心とする選択

NICE の動きと、阪神淡路大震災の体験を踏まえ、私たちは大阪教区の新生のあり方として「地区宣教司牧共同体を中心とした」教会を選択いたします。

私たちが、阪神淡路大震災で見つけ出した宝の一つは、従来の小教区の枠から抜け出すことによって、被災者の方々と深く交わった体験であったと思います。地域の人々との交わりは、小さな枠に閉じこもっていた私たちの教会の姿を反省させられるきっかけであったとともに、未来への示唆ともなった喜びの体験でした。

地区の強調は、交わりを生きるために、小教区中心的な教会像の枠を超えていく有効な選択です。それは小教区の否定ではなく、小教区の共同体性を引き出すためであり、多様な共同体の連携によってキリストのからだをつくるものだと言えるでしょう。

例えば、問題の大きさと人材の豊かさが必要なものを地区が受け持つ事により、小教区はより生活共同体的な交わりを主体とした小教区となっていくことでしょう。

そのために、次に、地区を中心とする教会のあり方が小教区共同体をより活かし、教会を豊かにするものであることを見て行きたいと思います。

## 第3章 地区宣教司牧共同体が持つ豊かさ

教会を小教区の枠からだけでなく積極的に、視点を換えて地区中心の形で見ることによって次のような豊かさが見られると思われます。教会共同体の持つ広がりのある豊かさを以下に列挙してみます。

### (1) 「谷間」に置かれた人々の心を生きる教会へ

谷間に置かれた人々との関わりは、すでに小さな個人的な関わりでは担えなくなっています。例えば、釜ヶ崎の問題解決への取り組みと援助とは、社会正義の問題として現在でも小教区の枠を超えています。社会(地区)の中に生きる、私たちですから、その社会性に対応できる私たちの意識の改革と組織の広がりが必要とされます。小教区が抱える社会的な問題は、地域全体で関わっていくべき性格のものであり、障害者の方々や谷間に置かれた人々がない共同体は教会と言えないのではないかというダイナミックな意識変革のためにも、従来とは違った教会の枠組みが貢献するものと思われます。

- ① 地区共同体の社会に向けてのビジョンをつくることを促す。
- ② 教会が内向きの意識から、地域社会への証しへの動きと意識を生み出す。
- ③ 地区の多くの人々が、様々な活動に参加し、多くの人々と交わり、視点が変化する可能性が広がる。
- ④ より組織化された活動になるため継続的な関わりが出来る。

### (2) 交わりの教会へ

私たちは今まで、交わりの枠を、知らない間に小教区そのものとして限定してきたように思われます。

小教区同士、修道会・諸事業体と小教区、地区同士、また地域との交わりはほとんど行われていませんでした。交わりの持つ広がりと発展性を必要とされる今、地区を選び取る意味が見出されます。

- ① このことによって司祭・修道者・信徒が「私の教会＝地区」となる。
- ② 教会の自己目的の意識から地域の人々とともに歩む姿勢が生まれる。
- ③ すべての人々に開かれ、多くの人に関わることによって教会の動きがダイナミックになる。
- ④ 公の活動になるため情報伝達が明確になり、よりきめ細かくなる。
- ⑤ 諸事業体・修道会とともに地域に向けての協働の場、福音化への働く場が増える。
- ⑥ 「私のイエス」から「私たちのイエス」へ信仰が深められる。
- ⑦ 他宗教との対話の場が広がる。

### **(3) 共同責任を担い合い、協働する教会へ**

地区という広がりのある共同体を選択した危険性として、責任の拡散と不明確さを私たちは認識しています。それゆえ、共同責任を目に見える形で確認する組織のあり方、意志決定の方法等が必要とされます。

それは、消極的な対応としてではなく一人一人に与えられた責任(使命)の自覚が促されることによって、生き生きとした信仰共同体が生み出されるという積極的な側面が豊かにあります。

- ① 司祭・修道者・信徒が責任をもって地区の諸活動に関わるようになる。
- ② 協力体制、共同宣教司牧への道が開かれる。
- ③ 立案・決定・実行・見直しの循環をともなう意志決定が共同で行われる。
- ④ 司祭・修道者・信徒がお互いの召命を見つけ、尊敬を持って協働できる。
- ⑤ 地区の宣教司牧の独自性を踏まえて自立した動きが可能になる(経済、人材、などの面において)
- ⑥ 定期的な見直しにより、現実の必要に対応する活動が継続される。

### **(4) 聖霊の導きを識別しながらともに歩む教会へ**

多様性が明確になる地区共同体の中であって、一致の原点である聖霊の導きを私たちはより意識的に求めることが必要になります。聖霊の導きは、それぞれ現実の問題に向かって歩もうとする私たちの心を一致させ、目を開かせ、それぞれの使命を確認させ、パンをともに裂くようにと促します。

- (1) 個人の働きが単独ではなく、聖霊の促しによって共同体から派遣された意識の中で現実に関わることができる。
- (2) 諸活動が信仰の目をもって振り返ることができるようになる。
- (3) 信仰がダイナミックに深まる。
- (4) その姿勢は、青少年等今後教会を担う人々に明確な生き方の方向性を示し続ける。

### **(5) 司祭・修道者との協力を重視しながら、信徒の役割と責任(使命)を前面に出す教会へ**

今まで、信徒の役割は補助的・従属的なものでありました。地区の中で、お互いに協働するようになると、社会の真っ只中で生きている信徒の位置と役割を充分活かしていく意識が生まれ、司祭・修道者の持つ共同体を支えるという奉仕職の持つ意味も豊かになってくると思われれます。

- ① 司祭・修道者・信徒の共同責任体制ができる。
- ② 信徒の召命を生かす場が増える。
- ③ 司祭が共同体を支えるという奉仕職に専念できる。
- ④ 召命という招かれた場の違いを豊かさとして味わうことができる
- ⑤ 社会の中で生きる信徒の霊性が明確になる。

## 第4章 地区を支える色々な刷新

地区は、小教区と教区とを結びつける大切な役割をもっています。小教区と教区という規模と役割の違う共同体を結び付け連携して生かしていく要の場にあります。地区を優先するからこそ、そこには生活共同体を含めた小教区の役割の充実が求められますし、地区を支え生かしていくような教区の支えが必要になってきます。具体的には、第3部で詳しく展開されることとなりますので、ここでは刷新の方向性を示していきます。

### (1) 小教区を活かす地区

- ① 小教区では担いきれない大きな活動を地区に移行させる事で、小教区は生活共同体的な役割(ミサ等の信仰の基本となる交わり)を、深めていく。そのことによって、小教区内でも生活に根差して信仰を支える場(家庭集会など)と教会のあり方の新しい理解が必要となる。
- ② 地区が地域内の福音宣教の方向性を定め活動するので、その中で小教区は、置かれた独自性を踏まえた動きが可能となる。
- ③ 地区の交わりを、いつも意識するために、情報の共有と決定のプロセスがオープンになっていく。また共同体としての色々な活動に取り組むことが必要とされる。役員任期制、組織の明確性、共同体の存在理由の明確化など。
- ④ 司祭・修道者・信徒が出会っている行き詰まりの受け皿を、地区が受け止めていく。そのことによって問題を閉じ込めない体制をつくる。

### (2) 地区を活かす教区組織

- ① 地区の役割を活かすために、教区が地区宣教評議会の活動を支え、教区宣教評議会の設置が考えられる。
- ② また、教区レベルにある各種委員会(青少年委員会、福祉委員会など)の組織変更と責任の明確化によって、地区宣教評議会の役割を活かす仕事の意向も考えられる。
- ③ 教区は地区を活かすための、人材配置を地区にも委ねることも必要となる。
- ④ 地区は予算決算を含め、小教区、地区活動が福音宣教方針とその計画の下に、実行されるような仕組みが必要。また教区はその報告を求める事により、お互いの責任と、評価を行うことが必要である。
- ⑤ 現在の地区・ブロックの再編成と小教区の再配置も早急に検討される必要がある。
- ⑥ 養成においても、地区リーダーの養成が急務。青少年の育成も、事柄が重大なだけに教区は本腰で取り組む必要がある。そこには、各種の修道会や諸事業体との協力が必要であり、教区はそれらの諸団体が協働することへの配慮が求められる。
- ⑦ また、社会に対して、教会の具体的な受け止め方や関わり方を表明し、地区や小教区の活動を支え、常に社会を見続ける教区の姿勢が必要。

こうしたことを考えながら、第3部で、具体的な刷新の計画を示したいと考えます。